ある日の稽古場の”記憶“

（ト書き）ある日の朝、「Ｒｅ：北九州の記憶」の５人の作家たちがやってくる。昨夜の宴会話が盛り上がりそうになった時に演出の内藤裕敬氏が登場。

内藤　じゃー、はじめようか。

穴迫　（お願いしまーす、と頭をさげつつ）５年目なんですよ、僕と鵜飼さんは。

鵜飼　最初の頃は、個人的なことを喋ってもらうまでに時間がかかっていたんですが、最近は結構、個人的な記憶を話してもらえることが多くなりましたね。何でしょう？私たちのスキルが上がった？

（全員、苦笑）

穴迫

穴迫　過去の戦争や時代の話より、その人が今、自分のたくさんの記憶の中から最もサイレントな個人史を選んで話してる感じがしますよね。より狭まった個人の世界に集中すればするほど、見えてくる全体像や普遍性もあったり…。最近は、”記憶“という言葉が「過去を掘り起こす」とか「資料にも残ってない記憶」という定義から、どんどん拡がって変容している気がする。

寺田　僕は書くのは３回目、かな。最初の頃は「失礼のないように…」と思い過ぎてインタビューもオドオドしてたんですが、だんだん慣れてくるというか。話はどんどん膨らんでいくし、膨らみ過ぎればそこからどう戻していくかと考えるようにもなったし。それがスキルかどうか分からないけど、でも慣れてきたからこそ聴ける話は増えてきたかも。

寺田

渡辺　僕は今回が初めてで、取材の時にどのくらい突っ込んでいいのか全く分からなかったんです。で、とりあえず全部喋ってもらおうかなー、と止めなかったら２時間ずっと喋りっぱなしで（笑）

大迫　僕も同じ方に伺ったんですが、２時間半？え、３時間くらい？長い時間を一緒に過ごして、同じ話を聴いたはずなのに、出来上がった戯曲は全く別物だったという（笑）

渡辺　僕は「あ、これ戯曲にしたら面白いかも」と思いながら聴いてたんで、出来上がってみると「あんだけ喋ったのに、そこを切り取るかよ？！」って思われたかも…。

大迫　僕も今回初めてだったんですけど、どこをどう膨らませ、どう創作するかは、ホントに作家によって全然違う。話す方の”記憶“と、作家の”創作“の掛け合わせ次第で、ここまで違う戯曲が生まれるんだな、というのが発見でした。興味深かったのは、インタビューに協力してくださる方々の記録ぶり。いろんな資料を用意してたり、地図まで書いてくれたり、中には自分がインタビューされてるところを映像に撮る人も。”記憶“という消えていくモノを、ちゃんと”記録“しようとしていて、その一つに今回の戯曲もなるんでしょうね。

大迫

内藤　５年やってきて思うのは、一つは取材に行くことの大切さと大変さ。もう一つは、そこで分けてもらった”記憶“を持ち帰った作家の成長。作家はみんなそれぞれ個性豊かだから、出てくる戯曲を読むと「よくもまあ、これだけ違うねぇ」といつも思う。同じ人の話を聴いても、自分の心のどこかが動く瞬間というか、センテンスが違うんだろうね。お互いの戯曲を読んだ時ってどうなの？

寺田　いや逆に「僕が気になったところ、何で気にならないの？え、こっちの方が絶対ひっかかるでしょ」と…

（全員、爆笑）

鵜飼　たぶん、心が動いたエピソードは同じだったと思うんです。で、これは相手が書くだろうと思ったので、あえてちょっとズラした（笑）。私はその人の話の中で、「いろんなことがあったけど、終戦の日には川に洗濯に行ってて空がものすごく綺麗だった」とか、「夜空に爆撃の弾が飛んでいくのが、不謹慎かもしれないけど綺麗に見えた」とか。私たちが知ってる史実と、その人が実際に体験して味わった感覚や思考のギャップが面白かったんです。そういうところを書きたいと思ったので、出来上がった戯曲を読んでもらって「そう！こんな感じだったのよ、昔は」と言ってもらえた時は、「よっしゃ！」と。

寺田　僕のヤツ…「カッパの話とかしてないよ」って言われなかった？

鵜飼　面白みがあるね、って言ってた（爆笑）

渡辺　僕は最初に内藤さんに「お前、クレイジーだぞ」って言われた（笑）。喫茶店の話を聴いたんですが、その喫茶店を外側から見たらどんな感じなんだろう、という視点で書きたいと思って。ヤンキーとかを登場させてみたら「お前、これホントにあったことなの？」と。「いや創作です」と返すと、「じゃあ喫茶店の良さとか、そこで働いていた人の良さをもうちょっと出した方がいいんじゃない？クレイジーでもいいけど」と言われてホッとしたんです。思いきって書いてみてよかったと思います。

渡辺

大迫　そうか。そのやり方は僕とは真逆だったかも。取材してると、皆さん自分の人生の面白かったことや伝えたいことがいっぱいあって、僕はそういうところに共感しながら、その人が大切に持っている記憶や歴史を、どうすれば演劇という手法で言祝げるだろう？と思ってました。

鵜飼　優しいもん、大迫くん。聴き方も寄り添ってるって感じ。

大迫　話してもらった記憶は、もしかしたら歳月で改変されてるところもあるかもしれないけど、内容はその人にとっての真実なわけで。それにどこまで作家がペンでメスを入れていいのか、その塩梅がすごく難しかった。書き終えてみて、僕らはその当時の体験は共有できないけど、”記憶“はもしかしたら、その匂いくらいは共有できるかもしれない、と思うようになりました。

鵜飼　何年かやるうちに、個人史を”記憶“というところまで掘り下げていくと、全体に共有されているオープンソースみたいなものにタッチできたような瞬間があって。個人史の再現ではなくて、その時代を生きぬいた人たちが共有している匂いや空気感の総体に触れるというか。同じ体験はしてなくても、誰もが「昔はそうやった」と思える共通項…それが”記憶“なのかな、と…

鵜飼

渡辺　記憶って、個人の所有物ではなくて、目の前の空間や時間に漂っているものかも。人と人との間で受け渡されて、初めて”記憶“になるんじゃないかな。

寺田　たとえばその人が死んでしまったら、その人の中の記憶されていたものも全部消えてしまうんですよね？そうすると記憶って、その人の魂に刻まれるのかな、とか。

内藤　俺はね、記憶って、消えていくからいいんじゃない？と思う。忘れられないとか、ぬぐい去れないとか、残酷な話だろ？だから、消えていくのがいい。でも、こうやって芝居にして観ると、「こんなことを知らずに、この記憶が消えていっちゃうの？！」と惜しみたくもなる。この５年で50篇くらいの物語が出来たんだっけ？全部面白いんだよね。でもね、面白いのはたぶん、すべて愚かな記憶だから。演劇では、素晴らしくて色鮮やかな記憶よりも、愚かな記憶の方が面白いの。俺らは人間だから、愚かなことをいっぱい繰り返しながら親になるじゃない？でも、愚かな記憶の蓄積があるからこそ、子どもに同じ轍を踏むなと教えることもできる。それでも子どもたちもやっぱりいろんな愚かさをおかしながら成長していくわけだ。そう考えると愚かな記憶ほど愛しくなるし、最終的には消えていくからいいんじゃないの？とも思うわけだ。

内藤

穴迫　今回は、オムニバス形式ではなく、６つの戯曲が１本の物語として構成されてるんですよね。今日はこれから稽古も見学させてもらうんですが、全体でまとめられた時に、内藤さんの手でどの辺りがカットされていくのか…実はちょっと楽しみにしています。自分の戯曲をバッサリ切られる衝撃は１年目に味わったんで（笑）。でもおかげで書き方が明確に変わって良かった。説明的な情報と感情的なセリフと、どこをどこまで入れて何を削るか。物語を成立させるための取捨選択のやり方とか、ホント勉強になりました。

内藤　あははは。「こんなに切りやがって、ふざけんな！」って後で怒るなよ（笑）

取材・文　重岡美千代